**第２７回軽井沢社会福祉大会　木村泰子様　ビデオメッセージ要約**

と　き　令和2年１２月６日

ところ　中央公民館　大講堂

***テーマ：コロナ危機で苦しむ子どもたちに今できること***

みなさんどうでしょうか。

想定外のコロナ。

大人の私たちでも毎日いろんなことで気をつかいながら、これまで気楽に道で出会う人と話ができていた、そんな関係性が今回のこのコロナで、距離をとり、マスクをする、当然なんですが大人の私たちも結構苦しい思いを抱えていると思うんですね。

こんな今、子どもたちはどうでしょうか。

今回のコロナで私はこのように全国の人たちと一瞬にしてオンラインでつながるので、魅力はたくさん感じています。

でも画面越しにしか会えない。これってどうなんだろうなって。

対面で会うのがいいの？それともオンラインがいいの？そんな問題じゃなくて。

今できることって何だろうなって。そういうことを、これが出来ない、あれが出来ない、これが苦しい、だから困るんだって、案外大人の私たちってそういう

発想になって、気がついたら周りのせい、環境のせい、人のせい、そんな風にしてしまって自分の中で解決してしまう。そんな大人の考え方をしてしまう自分がどうしてもいるんですが、子どもたちはそんな大人が困れば困るほど子どもは居場所がなくなっていくんですね。

今日は是非皆さんに子どもは大人と違って「困っている。助けて」って、自分の言葉で伝えることが苦手なんだってことを再認識していただけたらと思います。

今回のコロナで日本社会の今まで蓋をしていたたくさんの問題や課題が露呈しましたね。

例えばコロナに感染したら。自分がそうだったらとても困りますよね。困っている自分がいますよね。でもなぜか、コロナ差別という言葉まで報道されるようになって、困っている人が排除されていく社会、こういうことってどうなんでしょう。そんな大人たちの動きを子どもたちはどんなふうに見ているでしょう。

私は大空小学校という大阪市のほんの小さな小学校で9年間、校長として学びました。9年目は260人の子どもがいたんですね。でもこの260人の子どもたちの中に、もちろん重度の知的障害、自閉症、発達障害、今いろんなことでレッテルを張られている子どもたちがたくさんいました。9年間の中で今まで前の学校に行くことが出来なくて周りからいじめられたり、学校から排除されたり、そんな子どもたちが50人以上変わりました。皆さん驚かれると思うんですが。でも大空に来たら皆当たり前に学校に来ているんです。今までの学校にいけないのにどうして大空に毎日来るの？ってそんなことを子どもたちに聞くと、子どもたちはどの子も同じような言葉で表現するんですね。前の学校と大空の違いって何？ってきいたら、皆さんどうですか。子どもって何が違うって答えたと思いますか？

これはね、**「空気が違う」**って言うんですね。

え？空気？前の学校の空気どんな空気？って聞くと

私たちにとってはとても残念な言葉ですが、刑務所とか、牢屋とか、監獄とかこんな風に子どもは答えます。

私は大空を卒業してからもう5年になりますが47都道府県、呼ばれたらどこへでも行きました。すべての都道府県に行きました。どこに行っても講演会に子どもがいたり、大人のセミナーに子どもがいるんですね。その子どもたちって真剣に大人の中で私の大阪弁のこの話を聞いているわけです。「今日は学校休み？」て聞いたら、「学校に行ってない」そう言うんですね。「学校に行かんと何してんの？私のこの話、別にしんどかったら途中でいくらでも出ていきな」って大きな会場で一番前に座っている子どもにそんな風に言うと、「ほっといて」ってその子は答えていました。二時間位私の話を聞いてくれていたその子が、終わって帰ろうとしている私の所に駆け寄ってきて、「ねえあんた！」って私に言うんですね。「どうしたん？」って聞くと、「学校ってさ、何のために行くの？」って私に聞いたんですね。「え、なんで？なんでそんなこと聞くの？」って聞いたら、「学校に行ったって意味がない。何のために行くかわからん。何しに行くの？学校は何のためにあるの？」って怒るように聞くんですね。私はいつもの大空小学校の癖が出て、つい私は、「あんたさ、あんたが自分の学校に何のために行くかって他人の私に聞いてわかるわけないやん、何のために行くかそれはあんたにしかわからんやん。あんたが何のために学校にいくのか自分しか答えられへん話やでそれは。他人に聞く話違う」って言ったんですね。その瞬間にぴゃーっと走ってその子はどこかに行ってしまいました。私はその時に「しまった！」と思いました。大空小学校の子は毎日会うのに今の男の子は私とは二度と会わないかもしれないのに、私は何ということを言って自分の言葉をフォロー出来ない、あぁしまったな、やってしまったなーと思いながら、仕方がないと思って大阪へ帰りました。その翌年、関東の同じ会場に呼ばれて一年前の記憶がふっとよみがえったんですね。で、そのまま講演会が終わって帰ろうとしたら一人の女性が私の所に近寄ってきて、「去年ここで男の子が先生に学校は何のために行くの？て聞いてきた子どもがいたのを覚えていますか？」って言うんですね。「覚えているどころか、あぁ、しまったなーって、ずっとやり直しできないよなーって思っていました」と言うと、「実はあれは自分の息子です。去年は五年生でした」息子さんは私と出会う前から「学校に行く意味が分からん、先生の言っていることが分からん」そう言いながら学校に行くのを辞めていたそうです。

こういう子どもを世間では不登校って呼ぶんですよね。不登校という響きって、他人は新聞が不登校って書いて、文科省が不登校って言えば、不登校っていう言葉を当たり前に使いますが、当事者にとってはとても失礼な言葉なんです。学校に行って、吸える空気があればみんな子どもは行きますよ。吸える空気がないから学校に行かない、ただそれだけなんですね。そんな子どもを不・登校。この言葉の響きはとても失礼です。私はそう思い続けているんです。そのお母さんが「うちの息子はずっと不登校でした。でも木村先生とここで話をして、その日の夜、「あの人が学校に行く目的は他人にはわからん、あんたが自分で行って自分で見つけるしかその答えはないよって言ったから、僕は明日から学校に行く」そう言いながらその次の日から毎日学校に行ってるっておっしゃいました。毎日学校に行って、帰ってきて「行く意味が分からん」って文句ばかり言ってますが、自分が探さないといけないからと言われたからと、学校に行っているという話を聞かせてもらいました。

その日の講演会も実はその彼も来ていたんですが、今日は息子さんいないの？って聞いたら、あそこにいますって指差した先に、後ろを向いて、私に顔は見せていないけど柱の向こうで背中が見えました。私は後ろ姿に「ありがとう」って帰っただけですが。これが子どもなんですよね。空気なんですよ。自分が吸える空気がない、だから学校には行きたくても行けない。これって大人の社会に置き換えたら、学校の空気が吸えなくて行けないっていう子どもって、不登校で先生を困らせる子、学校を困らせる子みたいな表現をよく学校がすることがあるんですが、そうではなくて本人は困っているんですよね。社会の中でも、例えば軽井沢町で困っていることが困らなくなる、そんな町を作るには自分は何ができるんだろうか、こういうことを考える一人の自分がほんの少し自分を変える、それだけでみんなが自分らしく生きていくことができる社会が作れるような気がします。

大空小学校は困っている子が困らなくなる、そんな学校を作るために人のせいではなくて自分は何ができるってことをとても大事にしてきました。

ちょっとここで皆さん、映画を見ていただく機会もないと思いますのでみんなの学校の予告編を見ていただきたいと思います。

～2015年に公開された映画「みんなの学校」の予告編が流れる～

いかがでしたか。皆さんが見られたら、「なんか変わった子がいっぱいいるな」「この子って障害があるんじゃないの」「障害がある子はみんなとは違う特別な部屋で学ぶのが学校じゃないの」とか、そんな風にもしかしたら思われたのかもしれませんが、大空小学校はパブリックなんですね、公教育、公立の小学校です。軽井沢町にある小学校と全く一緒です。子どもは地域の宝です、すべての宝が大空小学校というパブリックの地域の学校で、自分らしくありのままの自分を出すから、ありのままの自分の価値が高まる、これが学校の学びなんです。皆さんはもしかしたら学校は先生たちが子どもたちを教える場だ思っているかもしれませんが、確かに私たちが学校に行っていた頃はそんな社会のニーズが待っていたので、そんな学校でした。でも、今の社会のニーズはどうですか。例えば、社会に出て、この人は障害があるから、障害がある人はここで生きてくださいね、障害がない人はここで生きてくださいね、そんな社会が待っていないですよね。今の子どもたちは10年後、地域を作る大人になるわけですよ。そうなったら今の皆さんは10年後、今の子どもたちが自分が生きている地域のリーダーになっていくわけですね。そうなったときに、もしかしたら私たちはだんだん体も動かないし、ひとりでいろんなことができない、そういう状況に当然なっていきますよね。そうなってきたときに、「誰々さん大丈夫？」「安心して。何かやることない？」そんな風に今の子どもたちが声をかける大人になる。これが地域の学校なんですね。大空小学校に入ってくるまでは学校に行けなかった子がどんどん行けるようになる。それはどうして？って言ったら、「空気が違う、前の学校は刑務所ってね」子どもにそれはどういうこと？って聞いたら3つ言うんですね。「教室で勝手にしゃべったら先生に怒られる」「椅子に座るのが苦しくなって動きたくなったら動くなって言われる」「教室にいて息が出来なくなって飛び出したら、逃げるなって戻される」刑務所と一緒やろって。この言葉はとても辛かったんですね。きっとね、学校の先生たちは一生懸命この子を育てなければと一生懸命教えている、指導している。でも子どもは苦しんでいるんですね。私たちも大空小学校をスタートした頃はそんな教員ばかりだったんですね。でも途中で気づいたんです。私たちのやっていることって先生である自分が主語になっていないか、いい先生でありたい、いい先生になるために子どもたちをスーツケースにはめ込んでいるよねって。スーツケースに入らない子どもは次から次へ排除されていくんですよ、スーツケースってサイズが決まっているから。なんかスーツケースの中に入れる子はいい子だねって評価できる、でも長い棒の子がスーツケースに入ろうと思えば折らなければ入らない、大きな風船みたいな子がスーツケースに入ろうと思えばプスって空気を抜かなければ入らない、これっておかしいねって。一人ひとりの子どもがみんな違っていることが当たり前なんだよって。みんな挨拶ができて、地域で出会った子どもたちがみんな「こんにちは」って挨拶ができる、でも出会ったときに挨拶もしない、この子はダメ！こういう評価を、もし大人がしてしまうと、この子どもはずっと人を信頼できないまま社会に出てしまうと思うんですね。挨拶ができない子どもって当たり前にいるんです。でもね、それは挨拶ってしたことがないから。生まれてから6年間、その子の家の中で「おはよう」とか「おやすみ」とか聞いたことがない、子ども自身が。それどころか大人の顔色を見ながら、言うことを聞かなければご飯を食べさせてもらえない。信じられないと思いますが、殺すぞなんて言葉をしょっちゅう親から聞く。こんな子どもは今当たり前にいます。全国に。そんな子どもたちが小学校に来たからって、「おはよう」って言ってもらって「おはよう」って言えるわけがないんです。でも挨拶もできない子を「なんだ、あの子は。家はどうなってるんだ」ってそんな風に大人がもし見ていけばその子はどこで大人に対して安心な気持ちを持てるんでしょうか。さっき、学校が刑務所って言った子どもが、どんどん学校に行かれなくなって、学校に行かれないのは自分が悪いと自分を苦しめているわけですね。親もとても苦しんでいました。親が、子どもの首を締めようとしているそんな親子も大空小学校に転校してきました。そんな親子から、私たちはやっぱり自分達には知らない、経験もしない、そんなことをいっぱい学ぶんですね。学ぶたびに自分が変われるんですね。これが学びなんですよね。大空小学校はじゃあどんな空気なの？って。前の学校が刑務所、じゃ大空はどんな空気？って聞くとほとんどの子が「え、普通」って言うんですね。普通って言葉はこういう時に使うんだなと。大人の言うことを、「はい、わかりました」と答える。こういう子が普通で、挨拶もできない、返事もできない、大人の言うことを聞かない、こういう子は特別だと。こういう時に普通っていう言葉を使うんじゃないかなと。私たちはそんな子どもたちからたくさん教えられました。子どもってみんな違った環境で育ってきて義務教育に入るんですね。軽井沢町のすべての子どもたちは、軽井沢町の宝です。だって10年後は軽井沢町を作る大人になるわけですから。このすべての宝を誰ひとり取り残すことなく育む、これが軽井沢町の大人の皆さんの仕事であってもらえたらすごく嬉しいなと思うんですね。

子どもって、私らの顔を見てとしか言わない子も当然いるんですね。ある一人の子どもが入学してきました。この子は入学式にも当然、怯えて出られないんですね。運動場を走り回っているだけでした。この子は家でネグレクトを受けていて、生活保護で、月の初めは食べるものがあるのですが、月の終わりになったら体重が減っていくんですね。こういう子どもでした。この子がね、朝、学校に来るときに地域でいつも同じ場所に立っていただいている堀尾さんという地域の方がいらっしゃるんですね。この方が毎朝その子が通る所で「おはよう」と声をかけてくださる。でも、彼はただの一回も「おはよう」という声も出さない、それどころか睨んでいく。堀尾さんが学校に来られて「あいつにな、おはようって言うんだけど、おはようってちょっと大きい声を出したら睨むんだよ。わしはおはようって言わない方がいいのかな」って相談に来てくださったんですね。私が「おはようって言ったらあの子は睨むんでしょ？つかみはOKじゃん。声をかけてあげて」って私が言うと「そうか」って言いながら毎朝「おはよう」と声をかけ、彼は睨む、こういった毎日が過ぎたんですね。

堀尾さんが職員室に来られて「なぁ、どうしたらいいかな。今日初めてあいつが声を出した。おはようって言ったら、、うるさいなって言った」って言うんですね。「もうどうしたらいいんかな、わしはもうあかんわ」って言うから「えっ、って声を出したんですか？もうばっちりやねん。わたしあの子にってもう何回言われているか分からないんだけど」って言ったら「あぁそうなんか、じゃあ安心しておはようって言うわ」って。そこから、一年生の秋くらいですね。その彼が自分から職員室に入ってきて、私の手を引っ張って「なぁ校長先生、今日は堀尾さんおらんかった。」雨の日でも立っていない日はない、いつもそこには堀尾さんがいらっしゃる、大空小学校の子どもたちの安心だったんですね。その日初めて堀尾さんがそこにいなかった。彼だけではない、たくさんの子どもがそこを通るから、みんな今日は堀尾さんいないって気づいているんですね。でも彼だけが血相を変えて飛び込んできて、堀尾さんいなかったって言うんですね。私は「なんか用事があったんじゃない？」って言うとこの子は私の顔を見て「違う、堀尾さん死んだんか」って言うんですね。皆さん、こういう言葉って驚くかもしれませんが、子どもってありのままの言葉をしゃべったら、大人が驚くようなことをたくさん言うんですね。だから大人に怒られるからありのままの言葉をあまり出さないんですね。「別に何でもないです」「分かりました」とか「はい」なんて最たる忖度の言葉です。はいって言っている心の中でどんな不安な気持ちを言葉に持っているかなんていうのは、私たち大人が気づかなかったら子どものことは見えないですよね。彼は死んだんじゃないのかって言うから「そんなことないでしょう」「大丈夫だから安心しな」って私がいくら言っても彼は納得しないんですね。「なぁ校長先生、今すぐ堀尾さんに電話して」って言うんですね。「電話してどうすんの？」って聞いたら「なんで立っていないか聞いて」って。もう彼はそれを知るまで私の周りから離れないんですね。私は迷惑じゃないかなって。一日休んで電話されるって迷惑ですよね。でも仕方がないから電話したんですね。奥さんが出て「ごめんね。今ここに彼がいて、堀尾さんがいないって。死んだんじゃないかって心配しているんだけど、堀尾さん今日はどうした？」と聞くと、奥さんはとっても遠慮した声で「校長先生ごめん。うちの人、今日は旅行なの」っておっしゃったんです。「あぁ、そうなんだ、旅行なのね」って。あぁ、良かった旅行なのねって思う反面、死んだんじゃないのかと、ここまで心配している彼に、旅行なんだってっていう言葉が言いにくいなというのと同時に、これは嘘でもつかなければ、なんか用事って言わなきゃいけないなって思っている前に「今日旅行に行ってるんだって、元気だって」とこの口が答えてしまったんですね。彼はどうしたと思いますか？その瞬間にね、小さい彼が私の顔くらいまで飛び上がって「よかったー！やったー！」と言って職員室から出て行ったんです。この彼って「おはよう」って言ってもらっても「おはよう」も言わない。「おはよう」って大きな声で言ってもらったら睨み返す、名前を呼んでもらったら「うるさい、だまれ」って言う。でも、たった一日堀尾さんがいないとこんな感じで。そんな子どもの心の中にある思いみたいなものは大人はなかなか気づかない。その子はもちろん臭いにおいもするし、汚い格好もしているし、みんながその子を理解できるにはやっぱり時間もかかる。でもそんな見える所だけでその子のことを判断したり、思い込んだりではなく、見えないところを見ようとする、そんな大人に彼のようないろんなところで困っている子どもが救われるんだろうなって。この子、一年生の最初の頃は私の顔を見て、、って。数えていたら100回目くらいにって言われ続けたら、なんとなくプチッときてね。「なぁ、は認める、でもは認めない」って言ったんです。結構本気で言ったんです。その子は私の顔を見てじっと考えた後に一言「ばあさん」って言ったんです。私はその言葉に打ちのめされて職員室に帰って「ばあさんって言われたー」って落ち込んだんですね。そうしたら周りの同僚たちに「なんてひどい校長だ。は認める、は認めないと言われた彼が一生懸命考えて、を丁寧語に変えてばあさんって言ったのに。なんでそれをショックだって戻ってくるんだ。今すぐ謝っておいで」って言われて、あぁそうかと思って彼の所に走っていきました。「なぁなぁごめん、わたしさ、ばあさんよりを選ぶから。がいい」と言いに行きました。変な顔をしていたこの彼が、その日から私にもという言葉を使いません。周りの人たちにもとかそういう言葉は使わなくなって、私を「校長先生」って呼ぶようになったんです。

軽井沢町の子どもたちも全国の子どもたちと同じだと思いますが、これまでは大人、特に親が子どもを育てる。これは日本社会の当たり前。残念ながら今は親が子どもを殺してしまうことが毎日のように報道されている。ましてこのコロナ禍の見えない中で子どもは安心してるだろうかって。

大空小学校がみんなの学校になった、どれだけ学校に行きにくい子もみんな行けるようになって、奇跡の学校みたいな言われ方をしているのですが、それは実は私たち学校側の人間に力があるとか一切そうではないんです。毎日大空小学校という地域の学校に、地域の皆さんが「地域の宝、今日は誰が困ってるの」って困っている子を探しに来てくださるんですね。困っている子の横で「何かやることあるか？」って。私たちは子どもがさようならって帰ったら、その子の命を校長がどれだけ逆立ちしても守れません。だって、学校から離れたら私たちも自分の地域に帰るんですね。学校からさよならって帰った子が次の日におはようって来てくれるから学校で学べる。地域の皆さんが地域の宝を育てる、この当たり前の時代に日本社会は変わってきています。いろんな子どもがいるし、もちろん障がいがある子もない子も。でもね、生まれた自分にたまたま障がいがある、それだけです。生まれた自分の家庭が貧困、それだけです。子どもに何か原因があるとかじゃない。ただ生まれた自分、ありのままの自分。この自分を大事に大人になるために自分をアップさせる、これが学校なんですね。地域のすべての宝が誰ひとり取り残すことなく、地域の学校で安心して地域の大人になる。そのためにぜひ皆さん、軽井沢町の困っている子が、親にも言えない、先生にも言えない、でも地域の皆さんって斜めの関係なので「先生に言わないでね」「お母さんにも言わないでね」って子どもから言われたときは「よし、おばちゃん（おじちゃん）なにかやることあるか？」って。そのおばちゃん（おじちゃん）とつながることで、子どもたちは苦しいときを乗り越えられる。そんなことをいっぱい大空小学校では教えてもらいました。地域の宝が安心して学べる、スーツケースではなく**大風呂敷**を広げて、子どもたちを大風呂敷の中に包み込んでやって頂けたらありがたいなと思います。

本日はありがとうございました。